

『古代アメリカ』17, 2014, pp.1-24

<論文>

アステカ人の供犠

—頂くことと捧げること—

岩崎賢

(茨城大学非常勤講師)

【要旨】

本論の目的は、アステカ人（ナワ人）の人身供犠がいかなる宇宙論に基づいていたかを宗教学的視点から考察することである。従来の研究では、アステカ人にとって太陽や大地は血液を動力源とする機械のようなものであり、この巨大機械への動力注入のために人身供犠を行ったと説明されてきた。しかしこうした「機械のアナロジー」による説明は、アステカ供犠の眞の理解を妨げるものである。これに対し筆者は、特にいくつかの絵文書の図像の解釈を通して、アステカの宗教伝統では、人が太陽や大地に「血を捧げる」という主題だけでなく、これらから「血を頂く」という主題もまた、重要な意味を持っていたことを示す。そして結論として、血を「捧げ」かつ「頂く」ことでアステカ人は宇宙内の諸事物と眞の互酬的関係を結んでいたこと、そして太陽や大地や人間・動植物からなる宇宙全体は、自己形成を続ける一個の「大いなる生命体」として成立し得ていたことを示す。

【キーワード】

メソアメリカ、アステカ人、人身供犠、血、宇宙論

【目次】

はじめに

1. 宇宙を循環する力／二元論的宇宙論
2. 血を捧げること
3. アステカ供犠に関する従来の議論
4. 血を頂くこと

おわりに

はじめに

アステカ人は16世紀初頭のスペイン人による征服以前に、メキシコ高原中央部に巨大な王国を

築き上げていた民族である^(註1)。王国の首都テノチティランでは1年18ヶ月^(註2)の各月に、中心部のテンプロ・マヨールと呼ばれる区域で大規模な祭祀が催されていた。人身供犠はこの18の年中祭祀の中核をなすものであった。

トウモロコシ農耕に生活の基盤を置くアステカ人にとって、太陽神、水神、大地神、風神、植物神などの宇宙的な神々の恩恵は、自らの生存のために欠かすことのできないものであった。人間は太陽や大地の恵みを受けて生きる。さらに人間や動植物は、衣食住の様々な局面において互いを支えあって生きる。供犠を論じる視点は、社会学的、心理学的、生物学的、と一つではない。しかしこの宗教的行為の意味が十全に解明されるかどうかは、こうした宇宙の互酬性の在り方を、いかに解釈者が生き生きと捉えることができるかという点にかかっていると言える。

以下、本論では、まず最初にメソアメリカの宗教伝統の特徴である「二元論的宇宙論」について論じ、人身供犠の前提となるアステカ宇宙論の基本構造を示す。第二節では、主に16世紀の征服直後に作成された文献をもとに、アステカの人身供犠の中核的要素であった「血を捧げる」儀礼について論じる。第三節では、アステカ供犠に関する従来の議論の問題点と、新たなる解釈の在り方について論じる。そして最後の第四節では、征服前後に作成された絵文書の図像資料をもとに^(註3)、従来の議論が十分に注意を払ってこなかった、アステカ供犠における「血を頂く」という宗教的主题について論じる。それにより、アステカ人の宇宙が、血を「頂く」と同時に「捧げる」という出来事からなる「大いなる生命体」として成立していたことを示したいと思う。

1. 宇宙を循環する力／二元論的宇宙論

アステカ王国の首都テノチティランは、メキシコ高原中央部の湖の中の島に作られた、人口20万人ほどの都市である。その中心部にあるテンプロ・マヨールは一辺が約500mの壁に囲まれた正方形の祭祀区域であり、その内部には農耕や漁労、商売、工芸、戦争などに関係する神々を祀った約80の神殿が存在した。この神殿区域のさらに心臓部をなしていたのが、戦神・太陽神ウイツィロポチトリと、農耕神・雨神であるトラロクに捧げられた「双子の神殿」であった（図1）。それは縦100m、横80m、高さ30mのピラミッド型基壇の上部に、二つの神殿が並べて設置された建築物である。それは古くからメソアメリカに存在し、アステカ王国を支える社会的原理でもあった二元論的宇宙論を端的に表現するものであった。

メソアメリカの二元論的宇宙論は、宇宙を二つの対立的かつ相補的な領域に区分する。すなわち宇宙の一方には天空世界に属する「熱い」領域があり、もう一方には地下世界に属する「冷たい」領域がある。アステカ人によると宇宙は立体的に9層の天空世界と、9層の地下世界、そしてその中間にある地上世界からなっている（この中間の地上世界を4層とみなして、天空世界の9層にこれを足して計13層とすることもある）。世界の中心と東西南北の四地域には、巨大な世界樹が地下世界に根を張ってそびえ立ち、天空世界をその幹と枝で支えている（図2）。天空と地下の力は、これらの世界樹の内部を通って地表へと到来する^(註4)。

メソアメリカの宗教の専門家であるA・ロペス・アウスティンは、この二種類の力の地上世界への流入こそが、この世に「時間=万物の変動」を引き起こす要因であったと述べている。

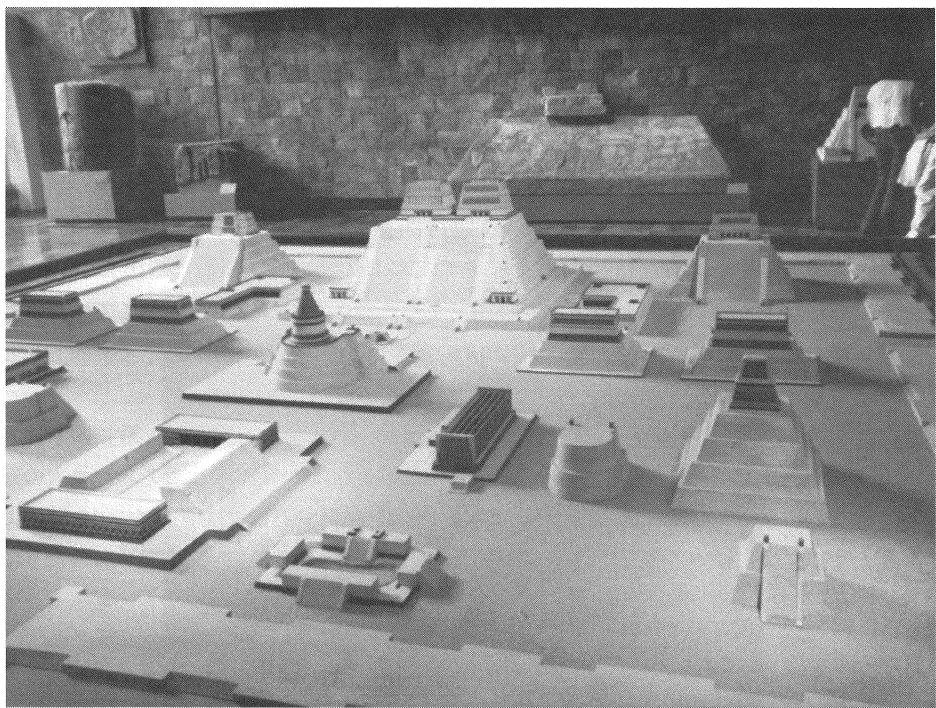


図1 テンプロ・マヨールの模型。中央奥にあるのが「双子の神殿」。
(メキシコ国立人類学博物館所蔵 岩崎撮影)

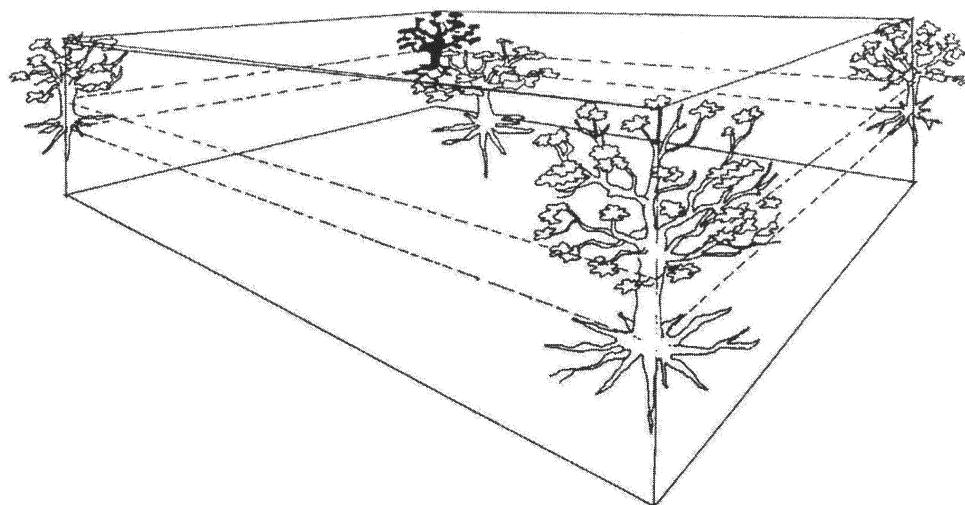


図2 宇宙の三層を貫く世界樹 (López Austin 1994: 94 より引用)

天や地で発生したものは、4本の木を通って伝わる。というのも、それらの木は宇宙の3つのレベルをつなぐ道だからである。熱い力は天の諸階層から降りてきて、冷たい力は死者の世界から昇ってくる。聖婚と戦争を同時に意味する行為において結び付けられたこれら2つの力は時の流れを形成し、時間が地上にあふれ出る。[ロペス・アウスティン 2001 : (2)-119] ^(註5)

テノチティランの「双子の神殿」において、太陽神ウィツィロポチトリは天空の熱い力を表現し、水神トラロクは地下の冷たい力を表現していた。この二種類の力の地上における出会いは、ロペス・アウスティンが言うように「聖婚と戦争」という二面的な性格を持っていた。ここではこうした二面性が明瞭に現れ出ている事例の一つとして、18の国家的祭祀の中のパンケツアリストリという祭祀を見てみよう。

パンケツアリストリは15番目の月（冬至の頃）に行われる祭祀で、「双子の神殿」の南側のウィツィロポチトリ神の祭壇を中心的舞台として実施された。それは太陽神にしてアステカ人の守護神でもあるこの神の、闇と大地の神々に対する勝利の神話を再現する儀式であった。16世紀にフランシスコ会士サアグンによって作成された『フィレンツェ文書』には、この神話が次のように記されている。[引用部の（ ）内の文は筆者による補足。以下、すべて同様。]

コアテペクと呼ばれる山があり、そこにコアトリクエという女が住んでいた。コアトリクエはセンツォン・ウィツナワという兄弟と、彼らの姉のコヨルシャウキの母であった。あるとき、羽根の塊のようなものが舞い降りて来て、コアトリクエは懷妊してしまった。センツォン・ウィツナワたちは母が懷妊したことを知るや怒り狂い…姉のコヨルシャウキを先頭に、母コアトリクエがいる場所へ向かった。彼らが到着するやいなや、ウィツィロポチトリが盾と矢をもって誕生した。…（ウィツィロポチトリは）コヨルシャウキを刺し貫き、すばやくその頭を切り飛ばした。…センツォン・ウィツナワたちも…その多くが死んでしまった。

[Sahagún 1978: 1-5]

この祭祀は、早朝の太陽の出現とともにウィツィロポチトリの神殿から飛び出したこの神の化身が、テノチティランに服属するいくつかの周辺都市を駆け巡り、各所でコヨルシャウキの戦士たちを象徴する人間を生贊として殺し、再び「双子の神殿」に戻ってくることで終了する。この時代、メキシコ高原中央部はいわば「戦国時代」の様相を呈していた。数多くの都市国家が競合する中で、アステカ人はつねに生存の危機に脅かされていた。こうした状況にあって、この光の神による闇の神々の制圧の神話劇は、戦いによって王国の繁栄をなしつけたアステカ人による宇宙的秩序の確立の試みであったと言える。

この神話劇における「聖婚」の主題は、天空から舞い降りてくる「羽根の塊」と、大地・水・闇の力の権化であるコアトリクエの結合という出来事に、明瞭に認めることができる。「羽根の塊」が天空の熱い力を表現するものであることは疑いない。一方、この「羽根の塊」を受け止めるコアトリクエはアステカの主要な大地母神の中の一柱であり、その名前は「蛇の腰巻」という意味である。現在、メキシコ市の国立人類学博物館に所蔵されている有名なコアトリクエ像は、蛇の腰巻を身につけ、その顔は鎖骨部から上に飛び出す二匹の蛇の頭によって造形されている。またその肩口からも蛇の頭が顔をのぞかせている（図3）。



図3 コアトリクエ像（メキシコ国立人類学博物館所蔵 岩崎撮影）

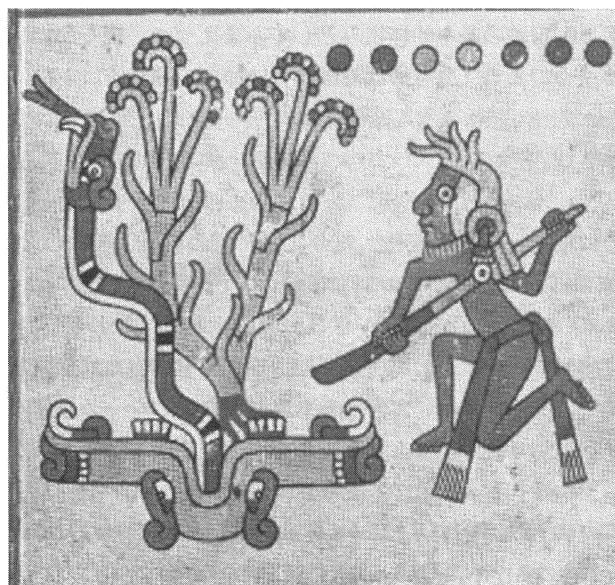


図4 大地から飛び出す蛇とトウモロコシ (*Códice Fejérvary-Mayer*, f.29)

また、この女神の住処であるコアテペクは「蛇の山」という意味である。メキシコ市の中心部にある「双子の神殿」の遺跡では、この神殿の基壇部から飛び出していくつかの蛇の頭の石像を見ることができる。これらの蛇は、大地が宿す成長の力の象徴である。それは天空の熱い力と並び、人間や動物や植物が等しく必要とする力である。

農耕の局面では、この成長力は大地に播かれたトウモロコシの種に宿り、やがてその芽は種の堅い殻を突き破って、地表に顔を出す。そうした植物の発芽の様子は、征服以前にこの地域の先住民によって作成されたある絵文書の中の図像に表現されている（図4）。そこでは掘り棒を持った神的存在の横で、穂状の花を咲かせた二本のトウモロコシが、一匹の蛇とともに大地から噴出している [León-Portilla 2005: 76-77]。

一方、この神話劇の「戦争」の主題は、ウィツィロポチトリとコヨルシャウキの戦いに示される通りである。コヨルシャウキはある意味でコアトリクエの分身であり、コアトリクエが持つ大地・水・成長の力の制御不能な暴力的側面を表現する女神であると考えられる^(註6)。それは無秩序に繁殖する熱帯雨林植物の成長力のようなものであり、ものに「堅さ」——形態と方向性——を与える天空の火の力と組み合わされなければならない。

ただし、天空の神は大地の神々を滅亡させはしない。この神話劇では確かにコヨルシャウキたちは死ぬが、その母のコアトリクエは依然として生き続ける。実際、一方の力がもう一方の力を完全に消滅させるということは、アステカの二元論的宇宙論においては世界の破滅を意味し、それは決してあってはならないことである。このことは「双子の神殿」が太陽神と雨神の二つの神殿からなるという事実、また、テンプロ・マヨールには大地や水の女神たちの神殿がいくつも建てられ、日々、篤い崇拜が捧げられていたという事実からも明らかである^(註7)。つまり、ウィツィロポチトリ誕生神話が表現しようとするのは、世界の存立のためには、二種類の力が宇宙を流动し、地上において出会い、その活力を損なうことなく均衡と調和の関係に入ることが必要である、ということなのである。

以上のこととアステカ宇宙論の基本的枠組みとしてふまえつつ、続く節ではアステカの人身供犠の儀礼の中心的要素の一つである「血を捧げる儀礼」について論じる。

2. 血を捧げること

テノチティランの供犠は、18の祭祀や、52年ごとに行われる「新しい火の祭り」、あるいは新しい神殿の落成式や王の即位式といった特別な機会に、壮大な規模で行われていた。その方法は、斬首、矢を射かけるもの、水に沈めるもの、さらに剣闘士として戦わせるものなど多岐にわたり、またしばしばテンプロ・マヨール以外の場所（湖や山頂）でも実施されていた。こうした複雑多様な供犠の中で、テノチティランにおいてもっとも典型的なものを一つ挙げるとすれば、次のようなものであろう。フランシスコ会士のモトリニーアの記述を参照しよう。

石刀を手にした儀式の執行者は満身の力を込めて仰向けに寝かされた犠牲者の胸を切り開き、素早くその心臓を取り出す。…儀礼の執行者は、取り出した心臓を神殿の入り口の上にあるまぐさ石の外側に向けて投げつけ、そこに血の跡をつける。落ちてくる心臓は地上でまだピクピクしているが、その後すぐに祭壇

の前におかれた碗形の容器にいれられる。またあるいは心臓を取り出すとそれを太陽に向けて高く差し上げることもあれば、時には神像の唇に血を塗りつけることもある。[モトリニーア 1979 : 98]

この記述を見てとることができるように、アステカの供犠では血液が重要な役割を果たす。一般にメソアメリカでは、血液はきわめて神聖な液体として扱われてきた [Miller and Taube 1993: 46]。前節で、大地から発芽する植物の成長力は「蛇」によって象徴されるということを述べたが、メソアメリカの図像学では、身体から流れ出る血液もまた、しばしば「蛇」によって表現される。例えば、後古典期マヤの都市であるチチェン・イツアの「球戯場」の有名なレリーフには、頭部を切断された生贊の身体から噴出する血液が、数匹の蛇によって表現されている（図 5a）。またこれと類似したものは、ペラカルス州の古典期の都市、エル・アパリシオのレリーフにも表現されている（図 5b）。さらに、先に見たコアトリクエ像の首や肩口から飛び出す蛇たちも、この女神の体から噴出する血液を表現するものとされる [Miller and Taube 1993: 64]。これらが意味するのは、人間の体を構成するものの中でも、血液はとりわけ強力に宇宙の生命力を表現する部位とみなされていた、ということであろう。

血液は、太陽、大地、さらには水（川や湖）にも捧げられる。ドミニコ会士のドゥランの記録には、アステカのアウェイツォトル王がテノチティトランに水路を建設したとき、四人の子供を生贊にし、その心臓から滴る血を貴石や御香や花と一緒に、水の女神チャルチウトリクエに捧げたと記されている [Durán 1984: 377]。またこのときには、動物の血液——人間の血液と同様に宇宙の生命力を宿している——も捧げられた。

神官たちの一人がウズラを殺して、水の中にふりまいた。その血液は大量であったので、全ての水が血に赤く染まって流れてきた。[Durán 1984: 376]

（＊以下、スペイン語史料の邦訳はすべて筆者による。）

血の儀礼は、大きな祭祀のとき以外にも日々の生活の中で、必ずしも生贊の死を伴うことなく実施されていた。例えばサアゲンは、アステカの交易商人たちが旅の出発の前に行っていた血の儀礼について記している。この儀礼は、第一節で示したような宇宙の空間的構造に基づいて行われる。そこでは血液はまず、家屋の中心部にある聖なる火に捧げられる。

…黒曜石の針で耳に、あるいは舌に傷をつけ、やがて血が流れ出すと、それを指にとって、テオナッパ（「聖なる四方向」）と言いながら、火に捧げた…。それから中庭に出て、指の爪に血を乗せて、天空にそれをはじき飛ばした。同じことを、東に…西に…北に…（南に）…向かっておこなった。[Sahagún 1992: 494]

さて続く節では、こうした血の儀礼を核心的要素とするアステカの人身供犠について、従来なされてきた議論を検討し、その問題点を指摘した後、筆者自身の解釈を提示しようと思う。

3. アステカ供犠に関する従来の議論

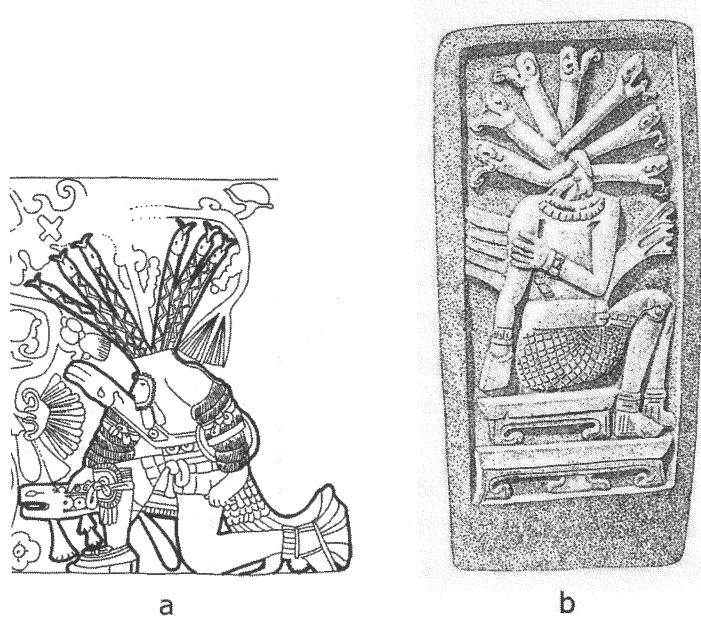


図5 a, チェン・イツアのレリーフ (González Torres 1991: 100 より引用)
b, エル・アパリシオのレリーフ (Miller and Taube 1993: 47 より引用)

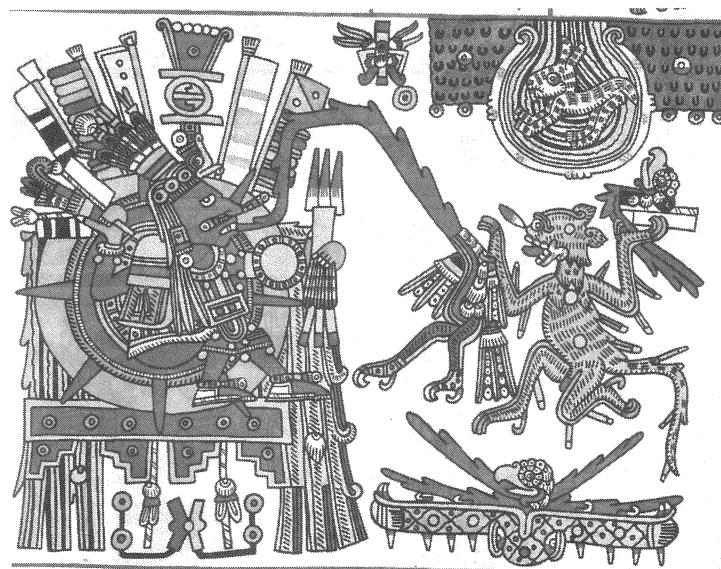


図6 太陽（左）、月（右上）、大地（右下）に、鳥の血液が捧げられる様子。
(*Códice Borgia*, plate 71)

アステカ供犠についての研究は数多く存在する。それらの研究の特徴と問題点については、筆者は既に他の論文〔岩崎 2006〕で論じたので、ここではその概要を述べるにとどめる。アステカ供犠に関する諸研究に現在に至るまで最も強い影響力を及ぼしてきた議論は、20世紀中葉に出版されたメキシコの考古学者のA・カソの著作『太陽の民』において示された議論である。彼は先のウイツィロポチトリ誕生神話などに基づいて、アステカ人の神話と儀礼の中心的主題は月・星の神々に対する太陽神の戦いであると主張した。そしてアステカ人が自らの使命としていたのは、戦場での闘いによって戦士の血を流し、神に「生命を表現するこの魔術的な食べ物を捧げ、神の戦いを応援する」ことであったと論じた〔Caso 1992: 118〕。このカソ説は、J・スーステル、C・デュバルジエ、Y・ゴンサレス・トレスなどの代表的なアステカ供犠の研究者らにより、この儀礼の理念的側面の説明として継承された〔Soustelle 1971; Duverger 1979; González Torres 1985〕^(註8)。

確かにカソが主張するように、アステカには「血液を欲する神々」という主題を示す神話がいくつか存在する。ここでは供犠研究者らがしばしば引用する、征服直後に作成された『絵によるメキシコ人の歴史』と『メキシコの歴史』という史料の中に記されている二つの神話を紹介する。

太陽が創られて一年後…四柱の神の中の一柱カマシュトルは八番目の天に行って、四人の男と、妻として一人の女を創った。それは戦いがなされ、太陽が心臓を食べ、血を飲むことができるようであった。…このカマシュトル、別名ミシュコアトルは、杖をとって岩山を創った。するとそこから四百のチチメカたちが現れ出た。…息子らは木の中に隠れた。するとチチメカたちがやってきた。そこで彼らは木から降りて、チチメカたちにとびかかり、すべて殺した。〔Tena 2002: 41〕

ケツアルコアトルとテスカトリポカの二神が、天から、女神トラルテクトリの上に降った。…二神が降る以前に…既に水があり、その上をこの女神が漂っていた。…二神は大きな蛇になり、一神は女神の右手と左足、もう一神は左手と右足をつかみ、それを強くねじって半分に分け、体の片方で大地を創り、もう片方を天空へと押し上げた。…（それから神々は）人間の必要とするあらゆる果実が女神から現れるよう命じた。その髪の毛で木や草花を、その肌で小さな草花を、その眼で沼や泉や洞窟を、その口で川や渓谷を、その鼻で谷や山々を創った。この女神は毎晩、人の心臓を食べたがって泣いた。心臓が与えられなければ泣き止まず、人の血を与えられなければ果実を与えようとしなかった。〔Tena 2002: 151-153〕

以上のような神話に基づき、アステカ人の人身供犠は血液によって神々（太陽や大地）を養うために行われたという説が、ほぼ定説として確立した。筆者はこれに対して次のような批判を行った。すなわちそれは、カソ以降の研究者の多くはアステカ供犠を「機械のアナロジー」において解釈しており、それがこの儀礼のリアリティから研究者を遠ざける結果になっている、という批判である〔岩崎 2006: 3〕。

「機械のアナロジー」による解釈とは、要するにアステカ人にとって宇宙は一種の巨大機械であり、太陽（や大地やその他の事物）はその内部を動く部品であり、人間の血液はその動力源である、とするような解釈のことである。こうした議論は、この主題に関する著作として比較的新しく、また現在広く読まれているものの一つである、K・リードの『アステカの宇宙における時間と供犠』にも明瞭に認められる。そこでは、アステカ人は宇宙を一種の「時計」のようなものとして理解して

いて、エネルギーを含む物質＝血液を宇宙に供給して「宇宙環境システム」を維持することが人身供儀の目的であったとされる [Read 1998: 127, 154]。

こういった解釈が行き着く帰結はなんであろうか。ちなみに先に断っておくが、筆者は宗教的・文化的現象の解釈におけるアナロジーの必要性を否定するわけではない。むしろ、人類学者のC・ギアツも指摘するように、それは解釈において重要な役割を果たすものである。

科学にしてもそれ以外でも、理論とは主としてアナロジーによって、つまりわかりにくいものをわかりやすいもの「として見る」こと（地球は磁石、心臓はポンプ、光は波、脳はコンピューター、宇宙は風船）による理解によって進められる…。[ギアツ 1991: 37]

ギアツによると、解釈とは、そのままでは理解しがたい奇異な現象を、主にアナロジーを使用することによって、理解可能な身近な現象としてとらえることである。ということは逆にもし、研究対象が解釈者にとって疎遠なものにとどまるならば、その解釈は不十分だということになる。では、カソの解釈は十分なものと言えるだろうか。彼は自らの解釈を提示する中で、次のように述べている。

アステカ人の人身供儀は…人類史において宗教的感情が有している多くの逸脱の一である。誤った前提から出発し、それが自明のものとなり、最もひどい結果が論理的に導かれることはある。[Caso 1992: 96]

カソはこのように述べた後、アステカ人の供儀を、中世ヨーロッパの魔女狩りやナチズムなどと比べている。こうしたカソの叙述はある意味で彼の研究者としての率直さを示すものではあるが、同時に、自らのルーツであるメソアメリカ文明の精神性の代弁者としては残念なことでもあった。なぜならここから言えることは、おそらくカソ自身は、少なくともこのアステカ供儀についての議論の遂行者としては、自らを「逸脱」に陥ることのない「正常」な存在とみなしていたということになるからである。そこでは解釈対象は「異常」なものとして突き放され、対象と解釈者の疎隔という問題は未解決のままであるように見える。これは、アステカ人は宇宙を「時計」のようなものとみなしていたと主張するリードに関しても言えることだろう。なぜなら現代人にとって、機械は人間の血液によって作動する——もしリードがそう考えているのなら話は別である——ものではなく、もしそう考える者がいるとすれば、それは「異常」ということにならざるを得ないからである。

確かに、人身供儀は我々にとって恐るべき行為である。それは解釈者に強い精神的緊張を強いるものであり、そのリアリティに接近することは容易ではない。しかしながら、人身供儀はアステカのみならず、広くメソアメリカ、さらには世界中の宗教伝統において、規模の大小こそあれ、最も重要な宗教的行為の一つとして遂行されてきたものなのである。そうである以上、人身供儀は理解されなければならない。

「機械」のアナロジーでは、人身供儀のリアリティに接近することは難しい。しかし解釈においてアナロジーの使用が必然であるとすれば、我々は「機械」とは異なる、別のアナロジーを探す必要があるだろう。そしてそのアナロジーは、解釈者と解釈対象の間の疎隔や断絶を固定するものではなく、両者の間に確固とした連続性があることを実感させるものでなければならない。

こうした方法論的問題に面してここで注目したいのは、宗教学者のC・H・ロングが提唱する、「研究者の主体の内にあるアルケー（根源）を探求する学問」としての解釈学である。

宗教体験とその表現には、ある永続的な構造があるとするならば、我々は、次のような結論を下さなければならない。即ち、起源を探求することは、客観的な歴史の中にあるアルカイックなものを探求することであり、この探求は、今では研究者の主体の内にあるアルカイズム archaism の探求によって補わなければならぬ。歴史と文化のアルケーを探求する学問 archaeology は、研究者の主体の内にあるアルケーを探求する学問によって、調和のある釣り合いのとれたものにされなければならない。[ロング 1970: 86]

ロングの提唱する解釈学においては、歴史的・文化的他者は、研究者自身の人間性と無縁のものとして切り離されることはない。むしろ研究者は、解釈行為を通して、解釈対象の中に自己の根源的な在り方を探求しようとする。これが適切に遂行されたとき、解釈者と解釈対象との疎隔は大きく克服されていることだろう（註9）。そこで続く節では、アステカ供犠のもう一つの側面である「血を頂く」という主題を考察することで、この解釈学的課題に取り組みたいと思う。

4. 血を頂くこと

ここまで見てきたように、「太陽や大地の神々に血液を捧げる」という主題を示す神話や儀礼の記述は、メソアメリカの宗教伝統には数多く存在する。ここではこうした主題を明瞭に表現する、ある絵文書の中の図像を紹介しておこう（図6）。そこでは頭部を切断された鳥の胴体から噴出する赤い色の血液が、左側の太陽神の口に向かって流れ込んでいる。図の右下では、口を大きく開いた大地の怪物が、この鳥の頭部から流れる血を飲み干している。さらに図の右上では、月（U字型の枠の内部にウサギが描かれている）に向けて、鳥の頭部から流れる血が捧げられている。

以上に見てきたような神話・儀礼・図像は、従来の研究においてアステカの人身供犠を説明する事例として扱われてきたわけだが、その一方で、それとは反対の主題、すなわち「人間が太陽や大地の神々から血液を頂く」という主題には、供犠研究者らは必ずしも十分な注意を払ってこなかつたようだ。しかし筆者の考えでは、後者の主題はアステカの人身供犠を理解するための鍵となるものである。以下では、この主題を示すいくつかの事例を見ていくことにしよう。

「人間が神々から血液を頂く」という主題に関して、一つ重要な神話が存在する。それは、創造神の血液と死者世界の骨との混合によって人間が創造される、という神話である。『太陽の伝説』という資料には、次のように語られている。あるとき神々は大地に人が住むことを望んだ。そこでケツアルコアトル神は、地下の死者世界ミクトランに死者の骨を取りに行くことにした。ケツアルコアトル神はミクトランの神々と会い、首尾よく骨を手に入れた。しかし地上世界に戻る途中、死の神々に追いかけて転倒したせいで、この貴重な骨は砕けてしまった。そこでケツアルコアトル神は、

それをまっすぐタモアンチャンを持って行った。そこに到着すると、キラチトリと呼ばれる女がそれを細かく砕き…それを貴重な容器の中に放り込んだ。その上に、ケツアルコアトルは自分の男根から血を注い

だ。[*Códice chimalpopoca*: 120-121]

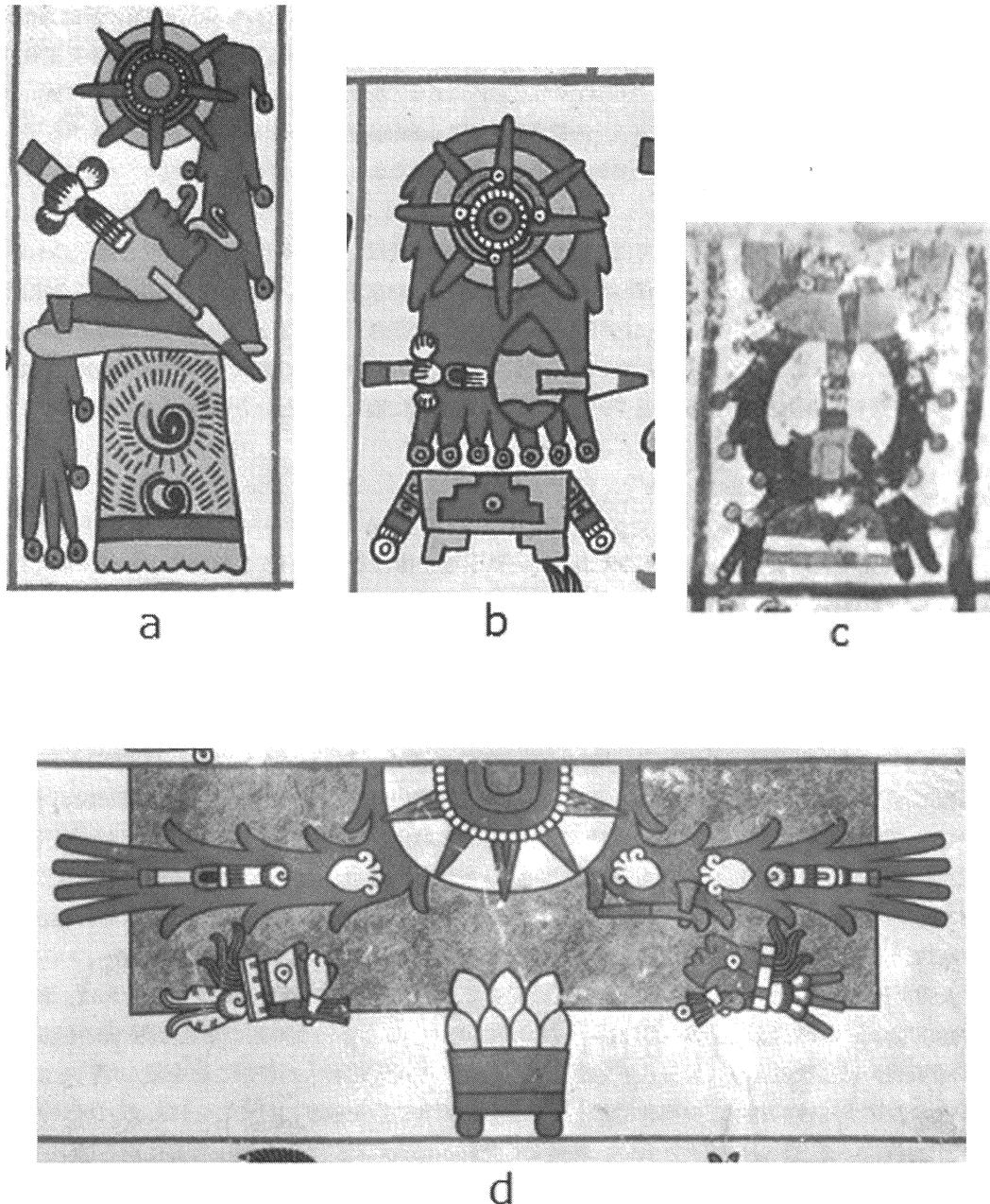
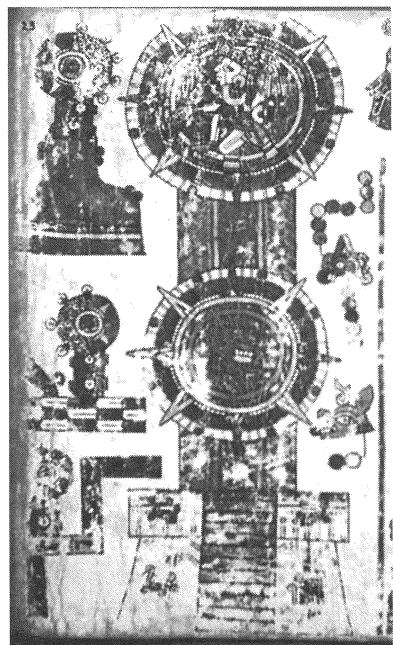


図7 太陽から流れ出る血

a, (*Códice Borgia*, plate 2) b, (*Códice Borgia*, plate 48)

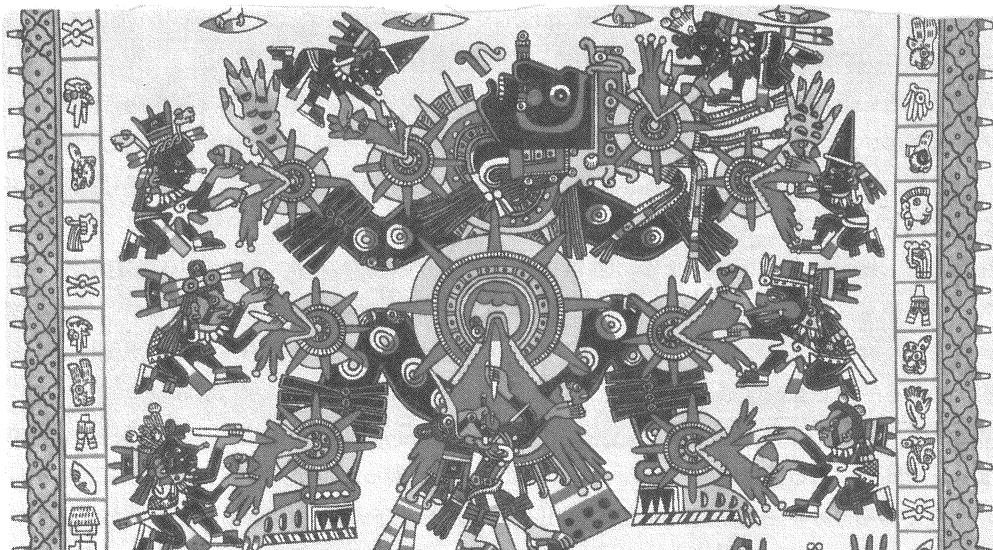
c, (*Códice Cospi*, col. 12) d, (*Códice Laud*, p. 7)



e



f



g

図7 太陽から流れ出る血 e, (*Códice Vindobonensis*, plate 23)

f, (*Códice Fejérvary-Mayer*, f.26) g, (*Códice Borgia*, plate 40)

こうして創造の地タモアンチャンにおいて、死者の骨と創造神の血液の混合から人間は誕生する。この神話はアステカ研究者にはよく知られた神話であるが、概して、それは人身供犠を説明する物語としてより、いかにして人間が創造されたかを説明する起源神話としてとりあげられてきた^(註10)。これはおそらく、前節で紹介した「太陽や大地が人間の血液を欲しがる」という神話の方が、アステカ人が人身供犠を行った理由を示す上で、より直接的で分かりやすいということによるのであろう^(註11)。

「人間が太陽や大地の神々から血液を頂く」という主題が強調されてこなかったもう一つの理由として、アステカの主要な諸資料には、この主題を示す神話や、これを直接的に表現する儀礼祭祀の記述が比較的乏しいということが挙げられる。それならば、この神話的主題はアステカの宗教伝統において重要性を欠くということであろうか。そうではない。実際のところ、この神話的主題は神話や儀礼と並び、メソアメリカの人々のもう一つの重要な宗教的表現であった図像表現(絵文書)において、雄弁に表現されているのである。ここではそうした図像表現の中から、本論にとって特に重要と思われるものをいくつか提示する。

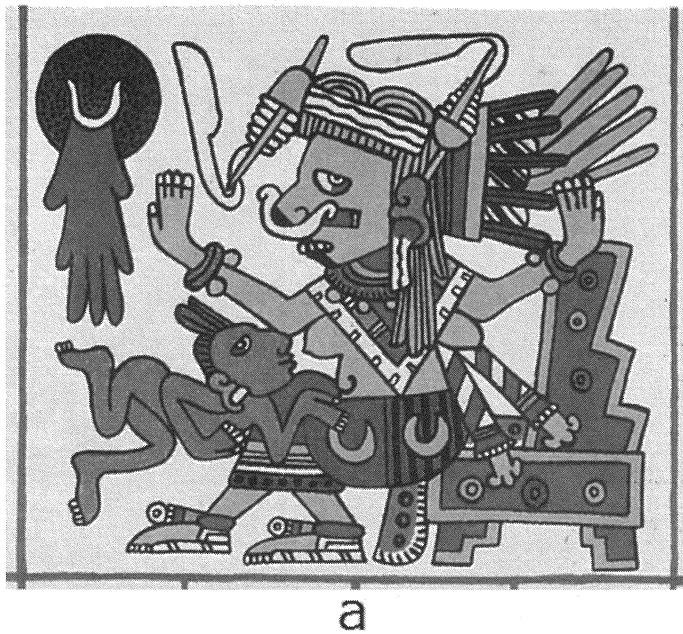
まず最初に、太陽が血を流すという主題の図像である。図7aでは、太陽から豊かに流れ出る、貴石を含んだ赤い色の血液が、山の頂上にある矢の刺さった心臓に降り注いでいる。一般にメソアメリカの図像学では、山は人間共同体を表現する。その上の心臓は地上的存在の生命を、矢は太陽から射す光を意味するものと考えられる^(註12)。同様の主題を示す図像は他にも存在する(図7b, c, d, e)。

図7fは、太陽と人間の誕生との関係を考える上で興味深い。そこでは太陽と、これから生まれ出ようとする子供は、へその緒でつながっており、それを太陽神トナティウがナイフで切断しようとしている^(註13)。ただしここでは、へその緒は赤く塗られておらず(黄色に塗られている)、厳密にはこれは「人間が太陽から『体液』を頂く」図像と言うべきかもしれない。

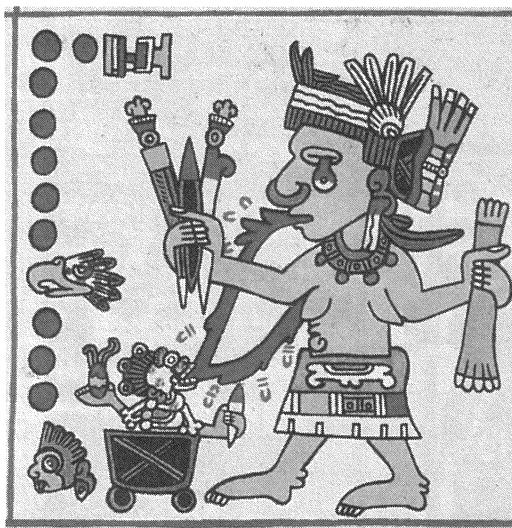
人身供犠という点からより直接的な価値を持つのは、図7gである。そこでは太陽神の体には九つの太陽がついており、それらを小さな神々が供犠用のナイフで切り裂いている。九つの太陽からは、貴石を含んだ赤い色の血液が豊かに流れ出ている。この図像は、人間だけが生贊になるのではなく、太陽もまた自らの命を捧げるのだということを表現している。

月もまた、地上に血液を降らせる。図8aでは、鼻飾りと腰巻に月のシンボル(U字)を身につけた大地母神トラソルテオトルが子供に乳を与えており、その左上には、月が赤い色の血液を流している様子が描かれている。一般にメソアメリカでは、月は女性の産出力や大地の豊穣性、さらには飲酒による酩酊と強い関係があると考えられていた[González Torres 1991: 106]。

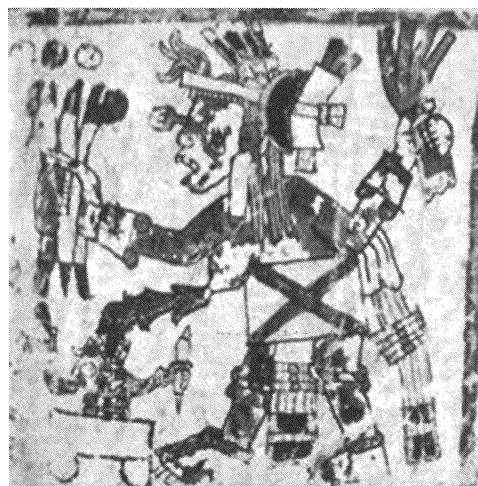
血を流すのは太陽や月だけではない。大地もまた血を流す。図8b, cでは、大地母神の口(あるいは舌)や乳房(あるいは心臓)から——女神はその手に握った供犠用ナイフによって自らを切り裂いたのであろうか——赤い色の血液が噴出し、それを左下の骸骨の姿をした子供が飲んでいる。その骸骨=子供の手にも供犠用ナイフと、心臓(女神のものか)が握られている。この骸骨=子供は、何を意味するのだろうか。ここでは先に挙げた人間創造神話において、最初の人間は、死者世界ミクトランの骨と、ケツアルコアトル神の血との混合から創造されたと語られていたことが思い出される。とすれば、これらの図像は大地母神の血液と死者世界の骨との混合による、人間の創造・誕生という主題を表現しているのかもしれない。



a



b



c

図8 a. 月（左上）から流れ出る血 (*Códice Borgia*, plate 16)

b. 大地母神の体（口と胸）から流れ出る血 (*Códice Borgia*, plate 48)

c. 大地母神の体（胸）から流れ出る血 (*Códice Vaticano B*, plate 78)



図9 神々から血を注がれるトウモロコシ=世界樹 (*Códice Borgia*, plate 53)

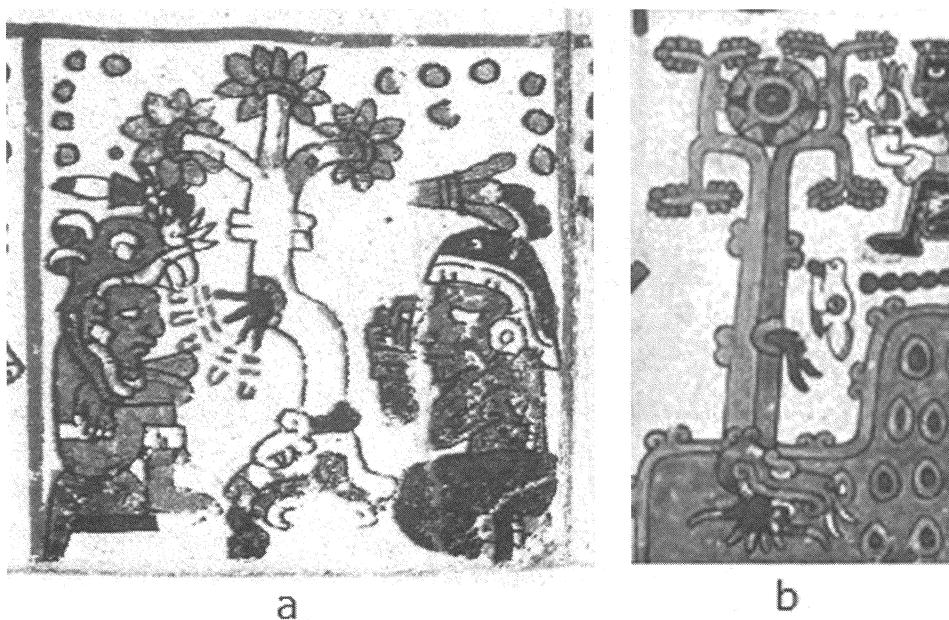


図10 幹の中間部あたりから血を放出する世界樹
a, (*Códice Vaticano B*, lam. 37) b, (*Códice Nuttal*, p.24)

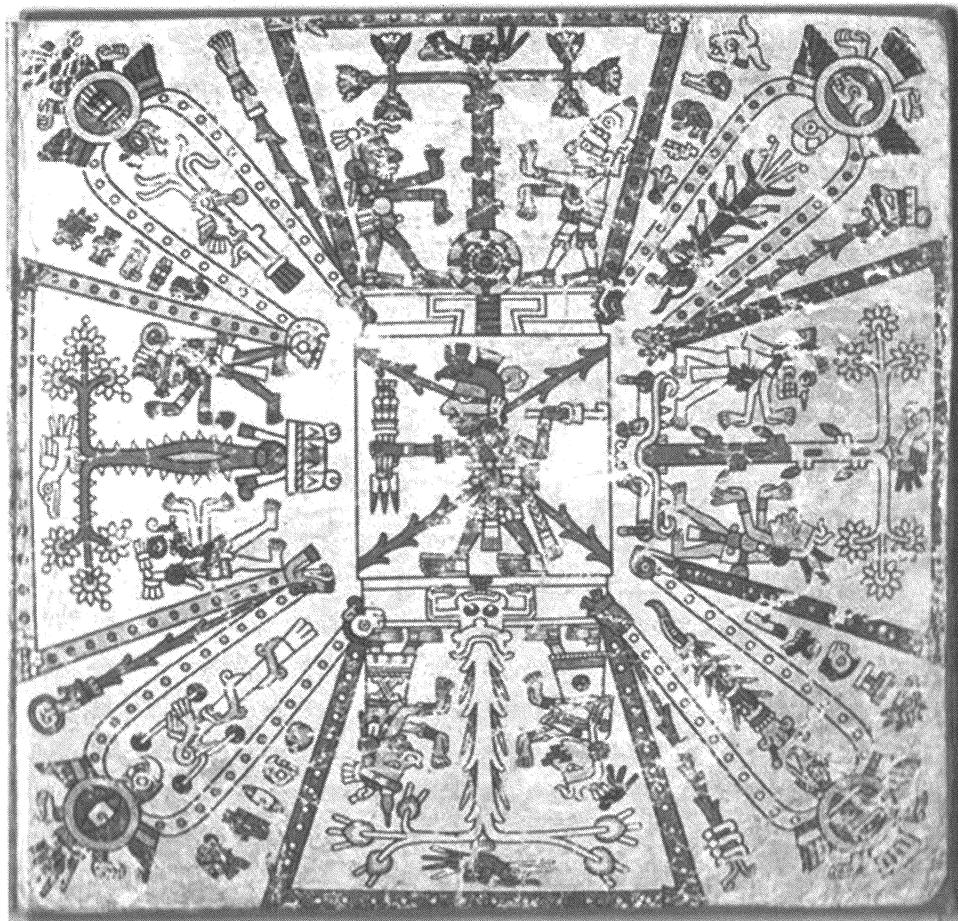


図 11 血液が循環する宇宙。時計針でいえば、2 時方向に神の頭部、5 時に肋骨、8 時に足、11 時に腕が描かれている。(Codice Fejérvary-Mayer, f.1)

以上の図像が表現するのは、人間が太陽や大地に血液を捧げるのと同じように、太陽や大地も人間に血液を捧げている、ということである。ということは、アステカ人にとって、人間の体内を流れる血に含まれる生命力は、太陽や大地がその体内に宿し、日々、地上の人間に送り込む生命力と——そのかけがえのなさや貴さにおいて——同じものであったということである。

生命力を送り込まれていたのは人間だけではない、植物もまた神々の血液を受け取っていた。図 9 では、二柱の神が自らの男根から放出する赤い色の血液が、骸骨の姿をした大地母神の体の上に注がれ、そこから巨大なトウモロコシが伸び出している。その頂上部には、天空世界を意味する聖なる鳥がとまっている。大地に根を張って天空へとそびえ立つ巨大なトウモロコシは、天地の生命力をその幹の中に充満させる世界樹であり、それゆえそれは、地上に立ち上がる全ての人間と動植物のアルケタイプ（究極的模範）である。

世界樹の問題について、もう少し考えてみよう。もし第一節で見たように、世界樹が天空世界と地下世界を地表に結びつける通路であるなら、それを伝って地表に流れ出る天地の生命力は、赤い

血液として表現されるのではないか。実際、その通りである。絵文書には「傷口から血を噴出させる樹木」の図像がいくつか存在する^(註14)。図10a, bでは、天空部分には花を咲かせ、地下部分には大地神が牙をむき出しにする、一本の世界樹がそびえ立っている。その幹の中間部あたりに「傷口」があり、そこから赤い色の血液が流れ出している。なお、メソアメリカでは世界樹に咲く花は、この世の様々な事物の誕生=創造を表現する最高のシンボルの一つであった^(註15)。

以上に見てきた数々の図像は、何を表現するのだろうか。それは、地上に生きる人間・動物・植物と、天空を動く太陽・月、そして大地は、同じ血液を分け合う一つの「大いなる生命体」の一部だということであろう。宇宙は決して無機質な部品が組み合わされた「機械」ではない。この「大いなる生命体」は、自らの体内に血液を循環させることで、新しい細胞と器官——地上の諸々の生命体——を作り出す。それゆえ、もし人間がこの聖なる液体を自らの身体内に滞留させるなら、「大いなる生命体」は衰弱し、やがて死ぬことになるだろう。こうした切実な感覚なくしては、アステカの「血を頂く」という図像的表現が生み出されることも、数々の「血の儀礼」が行われることもなかつたであろう。

最後に、ある絵文書に描かれた有名な図像をとりあげよう(図11)。そこでは宇宙は四方に展開し、東西南北の各場所で、花を咲かせた世界樹が天空を支えている。上は太陽の昇る方角であり、世界樹の根元には太陽が描かれている。下は太陽が地下世界に沈む方角である。時間的秩序=暦を表す記号と点が、空間全体にちりばめられている。そして宇宙の四方には、創造神テスカトリポカの身体の各部位(右上に頭、左上に腕、右下に肋骨、左下に足)が飛び散り、そこから赤い色の血液がみなみと、宇宙の中心に鎮座する火神シウテクトリに流れ込んでいる[León-Portilla 2003: 228-239]。この図像が表現するのは、宇宙は身体の隅々にまで赤い血液を行き渡らせる、一つの巨大な生命体だということであろう。

おわりに

最後に本稿の内容を簡単にまとめよう。第一節では、アステカ人の供犠を理解する上で前提となる、メソアメリカの「二元論的宇宙論」について論じた。そこではアステカ人の宇宙には、天空に由来する熱い力と、地下に由来する冷たい力が充満しており、この二種類の力が調和と均衡の関係を保つことで、地上の動植物はその生命活動を順調に全うできると考えられていたことが示された。第二節では、アステカ人の供犠の儀礼においては、血液は優れて豊かに、宇宙的な生命の力を宿す物体と考えられていたこと、そしてこの血液を太陽や大地に捧げる行為が重要な意味を持っていたことを示した。第三節では、20世紀中葉のA・カソのアステカ供犠論の出現以降、多くの供犠研究者が、アステカ人にとって宇宙は血液で作動する「機械」のようなものであった、という「機械のアナロジー」を供犠の説明のために用いるようになったこと、そしてその結果、研究者は供犠のリアリティから遠ざかってしまっているということを論じた。第四節では、筆者はいくつかの絵文書における「太陽や大地から血液を頂く」という主題を示す図像を提示しつつ、アステカ人の宇宙においては太陽や大地、そして地上の動植物や人間は、全体として、宇宙を循環する同じ血液を分け合う「大いなる生命体」として成立していたことを示した。

以上が本稿の内容である。第三節で述べたように、文化的・宗教的現象における解釈という行為

の目的は、解釈者（近代的世界に生きる自己）と解釈対象（古代的世界に生きたアステカ人）の疎隔を克服することである。この解釈学的課題を遂行すべく、筆者は今後もアステカ・メソアメリカの神話や儀礼、絵文書の図像、さらには近現代の民族誌的資料等の研究を続けていきたいと考えている。

註

- (註 1) アステカ人の歴史・社会・文化・宗教の基本的性格については、メソアメリカに関する近年の研究動向がよく反映された最新の概説書『メソアメリカを知るための 58 章』(井上幸孝編著) の、特にアステカ人に関する箇所 [井上 2014: 123-157] を参照。
- (註 2) アステカ人は 260 日の暦と 365 日の暦を併用していた。後者は、ひと月が 20 日の、18 ヶ月からなり、これにさらにネモンテミと呼ばれる不吉な 5 日間が加わる (20 日 × 18 ヶ月 + 5 日 = 365 日)。
- (註 3) 本論では、メキシコ高原中央部の民族集団の宗教性をよく表現するものとされる「ボルジア・グループ」と呼ばれる絵文書群の中の図像を、主に使用した。メソアメリカの絵文書の基本的性質については [León-Portilla 2003, 2005] および [Libura 2005] を参照。またこれら絵文書の扱いに関して岡崎雅子氏（愛知県立大学）から有用な助言を頂いた。
- (註 4) メソアメリカの二元論的宇宙論の基本的構造については [ロペス・アウスティン 2001] を参照。
- (註 5) 世界樹の数は東西南北で 4 本、これに中心の木を合わせると 5 本になる。
- (註 6) [Alvarado Tezozómoc 1992: 34] には、コヨルシャウキはウィツィロポチトリの母であったと記されている。
- (註 7) このほかアステカの宗教・神話・儀礼の概要については [タウンゼント 2004: 157-222] を参照。
- (註 8) このほか 80 年代以降のアステカ供犠に関する主要な研究として、次のようなものがある。E・M・モクテスマは『メソアメリカの人身供犠』(E・H・ブーン編、1984 年) 所収の論文 (E. M. Moctezuma, "The Templo Mayor of Tenochtitlan: Economics and Ideology") で、アステカ人は太陽運行と宇宙存続を確かなものとするために供犠を行った、という基本的理解に立って議論をしている [Boone 1984: 133-164]。M・グロリッシュは『アステカの儀礼／月例の祝祭』(1999 年) で、アステカ人は心臓を捧げることで『世界機械』の作動を維持すべく、あらゆるものに動きを与えようとした」と述べている [Graulich 1999: 6, 43]。これらの議論には、カソの議論の影響が強く認められる。A・ロペス・アウスティンは『タモアンチャンヒトラロカン』(1994 年) で、宇宙の「熱い力」と「冷たい力」が諸事物の間を循環する在り様を詳細に議論しつつ、人身供犠に関しては、それは宇宙的力の「移動の唯一の形態ではなく、また最も重要な力」というわけでもない」という立場をとっている [López Austin 1994: 33] (筆者の議論はこのロペス・アウスティンの動的宇宙論に多くを負っているが、ことアステカ人に関しては人身供犠は他の宗教的行為よりも重要度は高かったと考える)。D・カラスコは『供犠の都』(1999 年)において「宇宙—魔術的円環」という概念によって上述のロペス・アウスティンの動的

宇宙論と同様の議論を提示しつつ、特に供犠の宇宙創成論的な性格について論じている [Carrasco 1999: 190]。杉山三郎は『人身供犠・軍事主義・統治者』(2005年)で、テオティワカンの南北軸である「死者の大通り」の北区域は天空世界に、南区域は地下世界に対応しており、人身供犠はこうした空間的シンボリズムとの関連で実施されていたという興味深い指摘をしている [Sugiyama 2005: 220-223]。最後に挙げるのは、本テーマに関する最新の論文集『メソアメリカ宗教伝統における人身供犠』(G・オリビエ/L・ロペス・ルハーン編、2010年)である。これに収録された諸論文の中で特に注目されるのは、G・オリビエの論文 (G. Olivier, "El simbolismo sacrificial de los Mimixcoa") であり、そこではアステカ供犠における「再生の力を秘めた骨」のシンボリズムが詳細に論じられている [López Luján y Olivier 2010: 453-482]。これは供犠における「血」を重視する本論にとっても、興味深い内容である。

- (註 9) これはロングと志を同じくした宗教学者のM・エリアーデが「創造的解釈学」と呼んだものの遂行にほかならない [Eliade 1969: 2-3]。この解釈学が「創造的」であるのは、解釈者が、解釈という行為において、自分の中に新しい人間——それまで十分自覚していなかった自分自身の在り方——が立ち現れてくるという創造的出来事を経験するからである [喜田川 2004]。
- (註 10) 例えば、ジョーンズ／モリノーの「アステカ創世神話」という記事におけるこの神話の扱われ方を参照 [ジョーンズ／モリノー 2002: 190-194]。
- (註 11) 例えば、Y・ゴンサレス・トレスの「供犠と儀礼的暴力」という事典項目におけるこれらの神話の扱われ方を参照 [González Torres 2001: 102]。
- (註 12) 金星神トラウイスカルパンテクトリは、しばしば矢を持った姿で描かれる。この矢は金星の光を表現する [Miller and Taube 1993: 166]。
- (註 13) これと類似する、太陽神が子供のへその緒を手にしている様子を表現する図像は、次の箇所に認められる。*Códice Borgia*, plate 15.
- (註 14) A・ロペス・アウスティンは「血液を流す樹木」は創造の地タモアンチャンのシンボルであるという。彼はいくつかのタイプの世界樹の神話や図像に関して、次で詳しく論じている [López Austin 1994: 76-94]。
- (註 15) この主題について筆者は別の論文 [岩崎 2013] で詳しく論じた。

参考文献

井上幸孝（編著）

2014 『メソアメリカを知るための 58 章』明石書店、東京。

岩崎賢

- 2006 「アステカ宗教の新たな理解に向けて」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第 13 号、pp. 1-10. (<http://lacsweb.wordpress.com/old/num13/>)。
- 2013 「花は笑う——アステカ人の宗教における創造のシンボリズム」『宗教研究』第 87 卷、376 号、pp. 131-156. (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009625109>)。

ギアツ、C

1991 『ローカル・ノレッジ』梶原景昭訳、岩波書店、東京。

喜田川仁史

2004 「創造的解釈学について」『宗教研究』第77巻(4)、pp. 149-150. (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110002826332>)。

ジョーンズ、D・M／B・L・モリノー

2002 『ビジュアル版世界の神話百科(アメリカ編)』蔵持不三也監訳、井関睦美・田里千代訳、原書房、東京。

タウンゼント、R・F

2004 『図説アステカ文明』武井摩利訳、創元社、東京。

モトリニーア

1979 『ヌエバ・エスパニャ布教史』小林一宏訳、岩波書店、東京。

ロペス・アウスティン、A.

2001 「メソアメリカの宇宙観(1)(2)」『イベロアメリカ研究』井上幸孝・岩崎賢訳、第XXIII巻、(1) 前期: 75—94 / (2) 後期: 113—134.

ロング、C・H

1970 「アーケイズムと解釈学」『現代の宗教学』J. M. キタガワ編／堀一郎監訳、東京。

Alvarado Tezozómoc, F.

1992 *Crónica Mexicáyotl*, UNAM, México.

Boone, E. H., ed.

1984 *Ritual Human Sacrifice in Mesoamerica, A Conference at Dumbarton Oaks, October 13th and 14th, 1979*, Dumbarton Oaks, Washington, D. C.

Carrasco, D.

1999 *City of Sacrifice: The Aztec Empire and the Role of Violence in Civilization*, Beacon Press, Boston.

Caso, A.

1992 [1953] *El pueblo del sol*, Fondo de Cultura Económica, México.

Códice Borgia

1993 ed., F. Andres, M. Jansen, L. R. García, Fondo de Cultura Económica, México.

Codex Borgia

1993 ed., G. Díaz, A. Rodgers, Dover Publications, New York.

Códice Chimalpopoca

1992 UNAM, México.

Códice Cospi

1988 ed., C. Aguilera, INAH, SEP, México.

Códice Fejérváry-Mayer

1993 ed., F. Andres, M. Jansen, L. R. García, Fondo de Cultura Económica, México.

Códice Laud

1994 ed., F. Andres, M. Jansen, L. R. García, Fondo de Cultura Económica, México.

Códice Nuttal (The Codex Nuttal)

1975 ed., A. G. Miller, Dover Publication, London.

Códice Vaticano B

1993 ed., F. Andres, M. Jansen, Fondo de Cultura Económica, México.

Códice Vindobonensis

1992 ed., F. Andres, M. Jansen, G. A. P. Jiménez, Fondo de Cultura Económica, México.

Durán, D.

1984 *Historia de las Indias de Nueva España*, II, Editorial Porrúa, México.

Duverger, C.

1979 *La flor letal: Economía del sacrificio azteca*, Fondo de Cultura Económica, México.

Eliade, M.

1969 *The Quest: History and Meaning in Religion*, The University of Chicago Press, Chicago.

González Torres, Y.

1985 *El sacrificio humano entre los mexicas*, Fondo de Cultura Económica, México.

1991 *Diccionario de mitología y religión de Mesoamérica*, Larousse, México.

2001 “Sacrifice and ritual violence” In, *The Oxford Encyclopedia of Mesoamerican Cultures*, D. Carrasco ed., vol. 3, Oxford University Press, Oxford.

Graulich, M.

1999 *Ritos aztecas: Las fiestas de las veintenas*, Instituto Nacional Indigenista, México.

León-Portilla, M.

2003 *Códices: los antiguos libros del Nuevo Mundo*, Aguilar, México

2005 “El Tonalámatl de los Pochtecas (Códice Fejérvary-Mayer)” In, *Arqueología Mexicana*, ed. especial, n. 18, México.

Libura, K. M.

2005 *Los días y los dioses del Códice Borgia*, Ediciones Tecolote, México.

López Austin, A.

1994 *Tamoanchan y Tlalocan*, Fondo de Cultura Económica, México.

López Luján, L and G. Olivier, ed.

2010 *El sacrificio humano en la tradición mesoamericana*, INAH, UNAM, México.

Miller, M. and K. Taube

1993 *An Illustrated Dictionary of The Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*, Thames & Hudson, London.

Read, K. A.

1998 *Time and Sacrifice in the Aztec Cosmos*, Indiana University Press, Bloomington.

Sahagún, Fray Bernardino de

1978 *Florentine Codex: General History of the Things of New Spain*, Book 3, trans. by Arthur J. O. Anderson and Charles E. Dibble. The School of American Research and The University of Utah, Santa Fe.

- 1992 *Historia general de las cosas de Nueva España*, Editorial Porrúa, México.
- Soustelle, J.
- 1971 *The Four Suns*, Grossman Publishers, New York.
- Sugiyama, S.
- 2005 *Human Sacrifice, Militarism, and Rulership: Materialization of State Ideology at the Feathered Serpent Pyramid, Teotihuacan*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Tena, R.
- 2002 *Mitos e historias de los antiguos nahuas*, CONACULTA, México.

Ritual human sacrifice of the Aztecs : “receiving” and “giving” blood in the cosmos.

Takashi Iwasaki
(Ibaraki University)

Keywords: Mesoamerica, Aztecs, human sacrifice, blood, cosmology

The aim of the essay is to show, from the viewpoint of the phenomenology of religion, what kind of the cosmology the Aztec human sacrifice was based on. Former theories on the theme have explained that the Aztec people continued a series of bloody rituals because they considered the sun as a kind of a huge machine that operated by human blood. Those theories, advocated by many investigators until today, seem to have failed in understanding the meaning of the ritual as a result of using such an “analogy of machine”. Most of those investigators have concluded that the Aztecs did the bloody rituals because they had fallen into an ethical and rational deviation. In my view, to consider the other people as “deviant” or “strange” means a failure of interpretation, because, by doing so, the psychological distance between the interpreter and the people interpreted (the Aztecs) can not be dissolved. If we hope to understand the Aztec human sacrifice, we have to change it into something not strange for us. This is not, of course, an easy task. For this purpose I would like to present a new analogy, that is, an “analogy of a Great Living Creature”. I try to show an importance of the religious theme of “human beings receive blood from the sun, moon and earth”, through interpretations of myths, rituals and some pictorial materials of the pre-Columbian codices. By “giving” and “receiving” blood in this world, the Aztec people could enter into a true reciprocal relationship with various cosmic entities. From a different point of view, we can say that in the Aztec cosmology the cosmos could exist as a “Great Living Creature” that continued a self-formation by circulating the precious blood through round its body.

原稿受領日 2014年5月22日
原稿採択決定日 2014年7月27日